俺の生き様 旅の始まり

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の生き様　旅の始まり

【Ｎコード】
Ｎ０２２０Ｃ

【作者名】
ジャン

【あらすじ】
俺の生き様の続きです！バンが村を出て一週間起ってからの旅です！

旅の始まり

森で一人歩いているのは、２ｍくらいある刃が鋸のような奇妙な剣を背中に肩に担いでいる青年だった。

「迷った……」

開始そうそう目的地までの道を迷い、森を迷う青年『バン』は森を迷いながらも一週間前に村に置いて来た姉妹を気にかけていた。

「元気にやってかなぁ……」

そんな事を気にかけながら森を突き進むバンだった。

しばらく上の空で歩いていると既に日は暮れていた。そんなバンは、目の前に光があることに気付き光の方へ歩いて行く。

光が近づくにつれそこが小さな村になっている事に気付いたバンは村の違和感に気がついた。

「人の気配がしない…」

普通、家に明かりがついているのは人がいる証拠なのだが、このバンの目の前にある家は明かりはついているが人の気配が全くしない。

いや、目の前にある家だけではなく村の家全てが明かりがついてるのに人の気配がない。

「なんだってんだ一体……」

その日はそのまま村の家に無断に泊まった。

そしてバンは次に立ち寄る街で村の人々がいない理由を知ることになる。

確保

あの奇妙な村に泊まってから五日がたち、バンは村から出てようやく街にたどり着いた。

この街には活気があり、笑い声や商売の声がたえない。

「いい街だな」

バンは街の感想を素直に口にした。

カラン、カラン

街の中心地に近い場所にある酒屋でバンはくつろいでいた。店の中はまだ夕方なのにそこそこ人が多くそれによって酒屋は賑わっていた。

「ご注文は？」

バンが店の中を観察していると赤い髪で気の強そうな少女が尋ねてくる。

「この店のオススメと酒を一つくれ」

「かしこまりました」

そういって少女は店の奥に入って行った。

「お待たせ致しました」

しばらく待っているとさっきの女性が注文した物を持ってきた。

「どうも」

一言礼を言うと少女はキョトンとしたがこちらを見て笑みを浮かべて店の奥に戻って行った……用に見えたが何かに躓き転んでしまった。

「おいおい姉ちゃん、客のテーブルに突っ込むのはダメじゃねぇかぁ？」

赤い髪の少女に足をかけて転ばせた男が、睨みを聞かせながら少女に言う。

「も、申し訳ありません！」

少女がテーブルの上を片付けようとすると、男が少女の腕を掴む。

「は、離して！！」

掴まれていた腕を男から離すように勢いよく引くと少女の服が破れ、左腕があらわになる。

そして、その少女の腕には……

「その焼き印……奴隷の焼き印じゃねぇか！！」

少女の腕には半円の形をした焼き印がしてあった。

半円は奴隷の証。

少女はすぐに左腕を隠し店の奥に行こうとするが、男が少女の肩を掴む。

「おいおい、奴隷のくせに謝っただけですむと思ってんのか？奴隷なら何しても罪にはならねぇしなぁ」

「っ！！！」

男がそういうとさっきまで黙っていた客達も少女へと近づく。

「や、やめて……いや！！」

少女は顔を恐怖に凍らせ歪んでいた。一人の男が少女に手を伸ばした。

「っ！！！ギャアアアアアア！！腕が俺の腕が！！」

聞こえたのは少女の悲鳴ではなく手を伸ばした男の悲鳴。男の腕を飛ばしたのは１ｍ３０ｃｍはあり両刃の西洋剣を持った紫色の髪を持った少女だった。

「失せろ、下郎ども。先程から聞いていれば好き勝手いいおって、

これ以上この子に危害を加えるつもりなら私が相手になろう！」
少女の威勢に男達は軽く引きぎみになるが、腕を切られた男が突っ込み手に持ったナイフで剣を持った少女を突き刺そうとする。

ズドォン！！

突き刺そうとした男が横から飛んできた２ｍ近くある剣に吹き飛ばされる。

「女性に後ろからナイフで襲うのはどうかと思うけどな」

剣を投げたバンは剣が落ちてる場所まで移動して剣を持ち、男達に構える。

「今すぐ金を払って出ていくか？それともボコボコにされてから金を払って出ていくか？選べ」

男達は軽く周りを見るとそれぞれがナイフや剣を持ちバン達に向けて襲い掛かる。

「三下が」

『ガアアアアアアアアアアアアアア！！』

バンの剣の刃が轟音を出して回る。その音に武器を構えた男達は後ずさり、次の瞬間にはバンの一振りが男達に襲い掛かる。
５分と起たない内に武器を持っていた男達はそれぞれの武器を

折られ、吹き飛ばされ店の中には男達の飲み代が乱暴に置かれて、バンと、先程の赤い髪の女の子と紫色の女性が、めちゃめちゃになった店内でア然としていた。

「……えっと…とりあえず、すいませんでした」

「な、何がですか？」

バンの謝罪の言葉に困惑の表情を向ける赤い髪の女の子。

「なにがって…なぁ？」

周りを見渡してバンはまた、ア然とする。それもそうだろう、この酒屋の道具（主に椅子や、テーブルはバンの大破している）

「……すいませんでした…」

やはり謝罪の言葉しか浮かばなかった。

そんなバンを、黙って見ていた紫色の髪を持った女性が、バンの前に現れ突然剣を向ける。

「はい？」

突然目の前で剣を構えられたバンは、呆然と目の前の女性を見るしかなかった。そんなバンを睨みながら女性は、凛とした声でいった。

「街中での抜刀、及び暴力行為の現行犯でガイアナ国、第一騎士団隊長メノウ、クルスが、貴様の身柄を確保する」

バンが、石になった。

「……腹…減ったな」

今バンは街にある小さな宿屋の部屋で、椅子に縛り上げられ身動き出来ない状態にある。

「……スゥ……スゥ…」

そして目の前のベットで規則正しく呼吸をし、時折寝返りをうつ女性メノウが、寝ている。

「俺が何したったてんだよ……」

街の酒屋で身柄を確保されたバンはそのまま、宿屋へと連行され当たり前のように縛られ、後日ガイアナ国まで連行され、そこで女王に罪を裁いて貰うことらしい。

「まぁ、とりあえず目的地までは、なんとか着きそうだな」

元々バンが目指していた街が、ガイアナ国なのでちょうどいいといえばいいのだが……

「……腹…へったな…」

メノウが、起きるまで空腹に悩まさせられるバンだった。

奴隷商人

バンが確保された翌日、宿屋には頬に紅葉ができてるバンと申し訳なさそうにしているメノウがソファーに座っている。

「…いてぇ…」

「す、すまぬ…つい…」

頬を押さえ呟くとメノウが申し訳なさそうに謝る。

１０分前

「結局、一睡もできなかったな…」

バンは、メノウに拘束されてから一睡も出来ず黙って椅子に座っていた。

「……ん、……」

バンがぼやいていると目の前のベットで寝ているメノウが、目を覚まし辺りを伺っている。

寝ぼけてるのかメノウの目は虚でキョロキョロと周りを見渡していて、バンと目があう。

「ようやくお目覚めかい隊長さん」

メノウは、バンに声をかけられてもしばらくボォーっとしていたが徐々に目が覚めて来たのか目に力強さが戻ってきて、徐々に顔を赤くして

「キャアアァァァっ！」

『バチンッ！！』

バンの頬にメノウのビンタが炸裂し頬に見事な紅葉ができた。

現在に至る

メノウは、まだ気にしてるようでちらちらとバンの方を見ている。

もちろん見られているバンとしては、どうしていいか解らずただ黙っていたが沈黙を破ったのはバンの腹だった。

メノウは、最初はキョトンとしていたが次第に笑顔になり

「そういえば、朝食がまだだったな。食べるか？」

「あぁ、食べるよ。昨日から何も食ってないからな…」

「そうか。ちょっと待っていろ」

そういうとメノウは部屋を出ていきどたばたと朝食を取りに行った。

「普通捕まえた奴、部屋に置いてどっかいくか？」

バンは呆れながらも逃げないで黙って朝食を待つ。

朝食を食べ終わると、メノウが急に真面目な顔になり

「ところで、名前は何と言う？」

「バン。ただの旅人だ」

バンの名前を聞いたメノウは何か呟いているが、

「そんなはずないか…」

といって、バンに向き直り状況とこれからについて詳しく説明した。

メノウの話を簡単にすると、

1、バンはこれからガイアナ国に行き、街中での抜刀について罪が裁かれること。

2、ガイアナ国はこの街から出て徒歩で五日掛かるらしい。それまでは二人旅でガイアナ国まで目指す。

「まぁ、こんなとこだな。何か質問はあるか？」

「特にない。ただ……」

「なんだ？」

バンが気にかけていたのは昨日の赤い髪の少女だった。

「昨日の子はどうなった？」

半円は奴隷の証。少女がもしその身分を隠していたのだったら最悪もうこの街で生きてはいけない。バンはそれを気にしていた。

そんなバンの心配もメノウの一言で意味を成さなくなった。

「その娘なら、昨日の内に飛竜でガイアナ国に向かわせた。おそらくもうついているだろう。」

バンは心の中でよかったと、思ってはいたが口にはしなかった。

「まぁ、そういうことで私に着いて来てもらうぞ。罪とはいえ人を助ける為の抜刀だ。たいした事にはならんだろうしな」

「そうか、それよりいいのか？俺に武器を持たせて？」

バンはてっきり武器を持たせて貰えず旅をするものだと思っていたので驚いていた。

「なんだ、いらなかったか？」

「そういう訳じゃねぇけど…」

「バンは確かに罪人だが、あの場での抜刀は助ける為だあろう？ならばそれほど咎める必要もない。それに…」

バンと、身長が５ｃｍ程しか変わらないメノウはしっかりとバンの目を見ていた。

「バンは優しいような感じがするからな」

笑顔でそういったメノウは、少し恥ずかしいのかバンに背を向けた。

少しうれしいバンだった。

そして、二人は旅にでると思ったが、宿谷をでて広場にでると人だかり出来ていた。

その人だかりの中心にあるのは

腕に半円がある人達がボロボロになりながら大きな牢のようなものに横たわっていた

半円は奴隷の証

「久しぶりの奴隷だ！！なんと人数は村一つ分にも匹敵する！！」

村一つ分にも匹敵する奴隷の人数。
数日前に立ち寄った村。
人がいなくなった村。

バンは広場に近付き牢の中にいるひと達の半円の焼き印をみる。まだ明らかに新しい。
そして、バンが泊まった家の写真立てに飾ってあった写真の家族。その家族が今バンの目の前の牢の中でぐったりと横になっている。
バンが牢の中を覗いていると奴隷商人らしき人がバンに声をかけてきた。

「お客さん、どれか気にいったのでもありましたかい？」

商人の声を無視して、バンは牢の中にいる人達を見ている。

「オイ小僧。冷やかしならさっさと失せやがれ。」

反応がないことに買う気がないと判断した商人は、バンを威圧的に睨みながら言うがバンは視線すら向けない。

「いい加減にしろよ、こ

「黙れ」

『ドオォン！』

商人の言葉を遮るようにバンが言い、拳を振るう。バンの拳を

まともに受けた商人は吹き飛び、壁に激突する。その様子を見ていた周りの奴らの一部はバンにナイフやら剣やらを向ける。

「テメェらもあいつの仲間か？」

商人が吹っ飛んだ方に指を向ける。返答はないがそれを肯定として受ける。

「…仲間だな……なら……遠慮はしねぇ」

『ガアアアアアアアアアアアアアア！！』

バンが剣の刃を回し始めると武器を構えた男達は動けなかった。バンから感じる威圧感、殺気、怒気、全てが男達に向けられ、一歩も動けない。

「死ね」

動けない男達にバンは切り掛かる

「そこまでだっ！！」

〜〜〜メノウ〜〜〜

動けなかった……

広場に着いて、牢の中に人がいるのを見たとき私は確かに奴隷商人

に怒り、すぐにでも剣を突き付けたかった。
それなのに動けなかった。私は怒り剣の柄を掴んだ、だが次の瞬間には恐怖で怒りなど吹っ飛んだ。
確かに隣にいたバンは目付きは悪い。だが、その程度だった。
まだ、会って二日しかたっていないがバンは優しいとわかった。よくわからないが春の日差しのような温かみのある優しさだと思った。

だが、今のバンは春の日差しのような優しい物ではなく、ただ周りを壊す業火のような怖さだった。

いやだ……

まだ会って二日しか経っていないがこのバンは

いやだ。

あの温かさ無くなるのはいやだ。

バンは既に剣を抜き、男達に切り掛かっている

バンがあのままなのはいやだ。あの温かさがないのは

いやだ！！

「そこまでだっ！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

バンが男達に切り掛かると、メノウが男と、バンの間に入った。

「そこまでだっ！！」

バンがメノウを見ると、少し、ほんの僅かだが震えていた。
その姿を見たバンは不思議と怒りが引いていった。
バンは剣を肩に置き、メノウに近づいた。

「悪いな、怖がらせちまって」

メノウは小さく首を横にふる。

「大丈夫だ。」

メノウが言うのと、ほぼ同時に街の守備隊が来て奴隷商人達は全員捕まり、奴隷となっていた人達は奴隷の証である半円を治療し跡形もなく消されていった。

一週間後

奴隷として扱われてる人達は皆村に帰った。村の人達には何度も御礼を言われたバン少し照れながらもしっかりと、話をしていた。
バンと、メノウの出発は一週間延期され、色々と、奴隷と、なっていた人達を手助けしていた。

「なんだかんだで結構時間経っちまったな。メノウ」
「そうだな、だがこれでようやく出発できる。」
「出発出来るのはうれしいんだが、複雑だな」
バンはため息を付きながらいった。まぁ裁かれると、わかっていて行くのだから気分は滅入る。
「心配するなと、いったろ。元々街での抜刀はそれほど重くもないしな。安心しろ」
「うじうじ考えるだけ無駄だな。とりあえずよろしくなメノウ」
「こちらこそだ。バン」
そして今度こそ二人旅の始まりだった。

旅一日目　ナリスの助け人

バンとメノウが街を出て、二人旅となった一日目。

「バン、少し聞いてもいいか？」

「何を？」

少し前を歩くメノウはバンに振り向き今まで聞きたいと思っていた事を聞いた。

「バンの剣術やその剣いったいなんなんだ？」

「なんなんだって……流派のことか？」

「そうだ、私は変わった剣や剣術をたくさんみてきた。だが、バンの剣や剣術はみたことない」

「そりゃそうだ、俺の剣は知り合いに頼んで作って貰った特別製だし、剣術に関しては我流だからな」

バンの答えにメノウは目を見開き

「が、我流だとっ！！それほどの力を自分一人でつけたのかっ！？」

叫んだ。それもバンの耳元で

「っ～耳元で叫ぶんじゃねぇよ！！キィーンってなったじゃねぇか！！」

「す、すまん。そして顔が近い……」

バンとメノウの距離ただ今３ｃｍ弱！！

顔真っ赤にしてるメノウと同じく真っ赤にしてるバンは即座に顔を離したが、その場を沈黙がしめる。

「そ、それでさっきの質問の続きだが、バンは今までずっと旅をしてきたのか？」

「あぁ、１２歳位からずっとな」

「１２歳だと！？」

また目を見開き驚くメノウ

「っ～、だから耳元で叫ぶな！！ったく、そうだよ。そんで、今まで自由に世界を周って、人助けしながら旅してた」

キョトンとしながら、メノウはバンの顔を見ていた。

「な、なんだよ？」

「バ、バンは１２歳の時からそんな事やってたのか？」

震える声で、メノウはバンに尋ねている。なぜ声が震えるのかは、メノウ本人にすらわからない。

「あぁ、ナリスの助け人って知ってるか？」

「あぁ、ナリス国で前国主を殺し、自らが国主になり無茶な税を取っていた国主やその一味を一晩で潰し、ナリスの人々を助けた旅人がいて、ナリスの人々がその旅人に付けた呼び名が、確かナリスの

助け人。」

「随分と詳しく知ってるな」

「当たり前だ、ガイアナ国とナリスは親交があるし、私が、騎士団に入団して最初の事件だからな。それにその時の国主の一味はかなりの強者揃いだったのに一晩で潰したナリスの助け人の話は、ガイアナ国ではかなり有名で、人々の間ではナリスの助け人に憧れている者もいるくらいだからな」

「そうなのか、ナリスの助け人がねぇ」

バンの答えに今まで話してた内容を思い出しメノウは

「まさか、バン！？」

「っ～！！だから耳元で叫ぶな！！」

耳元で叫んだ。

「すまん、そんなことよりバン！？」

「だから何だよ？」

「バンの知り合いなのか！？そのナリスの助け人は！？」

「……は？」

メノウの答えに目を点にした、バン。

「だから、知り合いなのか！？ナリスの助け人が！？」

「……お前、実は天然か？」

「なっ！？天然とはなんだ、天然とは！？もういい！！」

そう行って、先をどんどん歩いていくメノウ。

「おい、置いてくな！！」

置いてかれそうで焦る方向音痴のバン。

「バン、みたいな奴とあのナリスの助け人が、知り合いなはずない！！」

そう言ってどんどん先に進むメノウ。

「いや、ナリスの助け人って俺なんだけど……」

「嘘をつくな！！バンみたいな奴が、あのナリスの助け人な訳ないだろう！？」

そんな感じに二人旅は始まった。

「だから置いてくな！！メノウ！！」

「知らん！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0220c/

俺の生き様 旅の始まり

2010年10月28日08時52分発行